

歴史家がNATOのユーゴスラビア戦争の嘘を暴く

ウクライナ戦争を理解するには、ユーゴスラビア紛争というネオコンの象徴的な出来事を理解しなければなりません。米国NATO体制が、単に一つの国家を破壊しただけでなく、その惨劇を瀕死の同盟の新たな存在意義として利用した手法は、ソ連崩壊後で最も決定的な出来事であり、今日に至るまでその影響は続いています。本日は再びアリゾナ大学歴史学教授のデイヴィッドギブス博士とお話します。デイヴィッド博士はユーゴスラビア紛争の歴史を研究しており、6月12日はNATOによるコソボ介入から26周年にあたるため、同盟が初めて自国領域外に足を踏み入れたこの出来事について議論することにしました。リンク：デイヴィッドの著書『First Do No Harm: Humanitarian Intervention and the Destruction of Yugoslavia』：<https://www.jstor.org/stable/j.ctv16h2n88> Neutrality Studies グッズショップ：<https://neutralitystudies-shop.fourthwall.com>

#M3

ユーゴスラビアでは客観性が失われ、それは今日でも非常に顕著です。ユーゴスラビアを振り返ると、その語調も内容も、今ウクライナで起きていることを強く想起させます。交渉を軽視する風潮も同じです。「悪人とは交渉しない、軍事力で粉砕するのだ」という考え方です。また、個人化も見られます。冷戦時代には個人化されることはありませんでした。私たちが戦っていたのは共産主義であり、スターリン時代でさえ「私たちはヨシフスターリンと戦っている」とは言われませんでした。そんなことはしなかったし、言われもしませんでした。しかし冷戦が終わると、分析は驚くほど単純化されました。「なぜ世界に問題があるのか？それはミロシェヴィッチやカダフィ、プーチンのような名前を持つ悪人がいるからだ」と。こうして、これらの悪人は突然、純粋な悪から現れたかのように語られ、社会的背景も分析の深みも一切無視されます。ただ「悪人」なのです。教育を受けた人々がこのような話し方をするのは驚くべきことですが、実際にそうしてきたし、今も日常的にそうしています。

#M2

みなさん、こんにちは。ニュートラリティスタディーズのパスカルです。本日は再びアリゾナ大学歴史学教授のデイヴィッドギブス先生にお話を伺います。デイヴィッド先生はユーゴスラビア戦争の歴史について研究されており、6月12日はNATOによるコソボ介入から26周年ということで、この出来事について議論しようと思いました。これは同盟が初めて、あるいは2度目に自らの領域外に足を踏み入れた瞬間です。デイヴィッド先生、再びお越しいただきありがとうございます。今回もこのような議論の場を設けていただき感謝します。実はこのテーマを話そうと提案してくださったのは先生で、コソボはユーゴスラビア解体の終盤だけでなく、NATOの今後の発展にとっても非常に重要な転換点だったからです。話す前に先生から「コソボが初めてではなく、ボスニアでも介入があった」とご指摘いただきましたが、それでもコソボはNATOにとって非常に重要な出来事でした。この点についてもう少し詳しく説明していただけますか？

#M3

もちろんです。ボスニアヘルツェゴビナとコソボへの介入は、明らかに1991年に始まったユーゴスラビアの崩壊の一部でした。ボスニアでは内戦が起こり、それがNATOの介入、すなわちNATOによる空爆作戦「デリバレートフォース」につながりました。この作戦は比較的短期間で、セルビア人勢力に対して行われました。アメリカとNATOは一貫してセルビア人勢力に対抗して行動してきたのですが、これは興味深い点です。なぜ我々はセルビア人勢力に対して行動したのか、という疑問が生じます。そして、その理由には納得できるものがあると思います。というのも、ユーゴスラビアが崩壊

する際、各共和国で選挙が行われましたが、旧共産党（社会党と改名）に投票した唯一の共和国がセルビアだったのです。セルビアは社会党に投票しました。

それで、ある程度反共主義的な動機があったと思います。セルビア人をバルカンにおける共産主義の最後の砦と見なしていたのです。ですから、それがセルビア人に対する敵意の大きな要因になっていると思います。セルビア人がより多くの残虐行為を行ったという主張がありました。実際に彼らはより多くの残虐行為を行いました。私は…人道的な配慮が主な動機だったとは思いません。その主な動機は、最初は反共主義的なもので、共産主義を完全に終わらせることでした。しかしその後、ボスニアとコソボの両方で、NATOに新たな正当性を与えるという、はるかに大きな動機へと発展しました。コソボはこの点でより重要でした。なぜなら、これは78日間に及ぶ大規模な空爆作戦であり、NATOがコソボに介入した主な手段だったからです。

ボスニアでは、クロアチア軍によって地上部隊が供給されていたため、状況はより複雑でした。しかしコソボでは、主な軍事作戦は空爆であり、それはNATOによるものでした。したがって、これが再びNATOが「重要な役割」を果たすべきだということを再確認する大きな要因となりました。ここで全体的な問題は、冷戦終結時にNATOが何の目的も持たないのではないかとという疑問があり、NATOはその役割を失って消滅するだろうという見方が広まっていたことです。さらにもう一つの要素として、90年代には—今では忘れられた歴史の一章ですが—ヨーロッパが顕著な独立性を示していたことが挙げられます。この時期、ヨーロッパは本気で独立した外交政策、つまりアメリカ合衆国から独立した外交政策を検討していたのです。

当時ヨーロッパ共同体と呼ばれていた欧州連合は、外交政策の目的を持つだけでなく（これは現在も続いています）、アメリカ合衆国から独立したものを本気で検討していました。これは、フランスのシャルルドゴールが1960年代から主張していたことです。しかし冷戦終結後、ドイツも独立したヨーロッパという考え方に次第に賛同するようになりました。そして、ドイツとフランスは常に欧州連合、あるいは欧州共同体の原動力であったため、これが実現し、ヨーロッパが独自の立場を持つ可能性は現実的なものでした。ソ連の崩壊によって、アメリカ合衆国が世界における唯一の権威となったというのが、その論理だったと思います。

そして、これは健全ではない状況だと考えられていました。アメリカ合衆国が事実上の独裁体制——ほとんど独裁に近い状態——を持っていたのです。つまり、文字通りの独裁ではありませんが、アメリカは自国の力に対するいかなる抑制もなく、世界規模で何が起こるかを一方的に決定できる立場にありました。そして、それは健全な状況ではないと考えられていました。ヨーロッパは、アメリカの力を抑制できると感じられていました。もちろん、個々のヨーロッパ諸国だけではそれはできませんが、集団としてならアメリカに対抗し、アメリカの一方的な行動を抑えることができると考えられていたのです。これにはもう一つの要素がありました。それは、この時期にユーロが登場しつつあったことです。1999年初頭、ユーロはヨーロッパの中央銀行の通貨として初めて公式に発表されました。その後数年で、ユーロは各国の通貨を完全に置き換えることになりました。

しかし、1999年1月1日はユーロの導入が始まった年でした。そして、アメリカではヨーロッパがこれを利用してアメリカの経済的な力やドルの役割を弱めようとするのではないかとという本当の恐れがありました。それは脅威と見なされていました。今この話をするのは驚くべきことです。なぜなら、現在のヨーロッパはアメリカの従属国のようになっているからです。今となってはまったく別の世界のように思えます。しかし、1990年代にはそうではなかったことを覚えておくことが重要です。ここでの鍵は、アメリカがNATOをEUの代替手段と見なしていたことです。つまり、ヨーロッパの独立への努力を弱める手段として、NATOをますます強調するという考えでした。ユーゴスラビア紛争——ボスニア、そしてより重要なのはコソボ——がその目的が達成された舞台でした。ここで一旦止めて、何か質問があればどうぞ。

#M2

いえ、つまり、これは非常に重要な点です。なぜなら、あなたがしているのは大戦略レベルと——まあ、戦術的と言いたいところですが、ユーゴスラビア紛争全体を単なる戦術戦争と呼ぶのは少し厳しい気がします。しかし一方で、この紛争の展開や、他の方法で対処できた可能性を考えると、そこには何らかの戦術があったようにも見えます。ご存知の通り、アメリカはデイトン（オハイオ州）——デイトン合意によって自らを平和の担い手として位置付けましたよね。しかし、あの合意は何年も前に実現できたはずでした。実際、長い間準備されていたのです。今おっしゃったNATOがEUの代替となるという話と、これを少し結びつけて説明していただけますか？

#M3

はい、そうします。ただ、私がどうしても伝えたいポイントの一つは、コソボがヨーロッパの独立を終わらせた場所だということです。つまり、コソボ紛争の後にそれが終わったのです。軍事的勝利によって「アメリカには勝てない、勝てないなら彼らに従うべきだ」という考えが定着しました。そして、ヨーロッパ諸国は実際にそうしました。それが今の現状です。その基本的な点だけは伝えておきたかったのです。すみません、あなたの質問を忘れてしまいました。もう一度質問を繰り返してもらえますか。

#M2

アメリカ合衆国の役割は、最初はユーゴスラビア内部の合意や解決を妨げるものであり、その後、基本的にはすでに以前に成立していた合意を、多くの流血の後、数年遅れてもたらした当事者となった。

#M3

はい、いいですね。さて、コソボの場合について詳しく説明しますが、欧州連合が自らの力と独立性を主張しようとした方法は、コソボ問題、つまりコソボ紛争の交渉を通じて平和的な解決を仲介することでした。そして、彼らはほとんどそれを成し遂げていました。平和的解決の基盤を築いたのですが、それはアメリカによって妨害されました。なぜなら、アメリカは「この問題を解決するのはアメリカ、NATOを通じてのみだ」と示したかったからです。アメリカはヨーロッパ諸国にその功績を与えるつもりはありませんでした。もしヨーロッパがそれを成し遂げれば、彼らはヨーロッパ、さらには世界において独立した勢力として自らを確立できてしまうからです。アメリカはそれを望みませんでした。だからこそ、アメリカはヨーロッパの努力を妨害したのです。皮肉なことに、その結果、数千人が命を落とす戦争が起こり、最終的にアメリカが押し付けた和平案は、NATOの戦争前にヨーロッパ諸国がすでに達成していたものと驚くほど似ていました。ほとんどヨーロッパ案と同じ内容だったのです。

#M2

詳細を教えてくださいませんか？ その計画の詳細と、それがいつだったのか教えてくださいませんか？

#M3

詳細について説明します。まず最初にやりたいのは、コソボ紛争の背景を説明することです。結論から言えば、当時は誰もコソボのことを本当に知らなかったのです。コソボについて何も知らない人ばかりで、それがプロパガンダの機会を無限に広げるのに最適でした。世間は白紙の状態だったので、好きなことを伝えることができましたし、実際にそうされました。コソボはユーゴスラビアの自治地

域でした。ユーゴスラビアは8つの地域に分かれており、コソボはその一つでした。住民の大多数は民族的にも言語的にも隣国アルバニア共和国の人々と同じアルバニア系でしたが、かなり多くのセルビア人の少数派も存在していました。

セルビア人とアルバニア人の間には激しい緊張があり、アルバニア人ははるかに低い地位に置かれていました。コソボはユーゴスラビアの中で最も発展していない地域であり、アルバニア人はユーゴスラビアで最も貧しい人々でした。彼らは1966年まで本当に文化的に抑圧されていました。1966年、ユーゴスラビアで政治的な動揺があり、内務大臣がチトーによって解任されました。新たな政策が実施され、コソボに文化的自治が与えられ、その地位が引き上げられました。アルバニア人は初めて実質的にこの地域を支配することができ、アルバニア語も大きく推進されました。状況は逆転し、コソボのアルバニア人は次第にセルビア人少数派を迫害し始めました。

時間の経過とともに、コソボからセルビア人に対する差別、嫌がらせ、そして移住が顕著に見られました。それは非常にゆっくりとしたものでした。1980年代にはこの問題に関する調査も行われており、当時の報道を調べてみると、西側メディアでも取り上げられていました。「民族浄化」という言葉が使われ、セルビア人が暴力というよりも、主に嫌がらせや差別によって民族浄化されていると表現されていました。また、1989年のアメリカ社会学評論には、ユーゴスラビアにおける民族的不寛容に関する研究があり、ユーゴスラビアの中で最も不寛容だったのはコソボであり、すべての民族集団の中で最も不寛容だったのはアルバニア人であると結論づけられています。

私がこう言うのは、コソボ危機の後半でアルバニア人が英雄として描かれ、セルビア人が悪役として描かれたからです。しかし、実際はもっと複雑だと思います。双方に憎しみがあり、アルバニア人側にも憎悪や差別が存在していました。1989年、ユーゴスラビア全体で民族間の友好関係が崩壊する中、スロボダンミロシェヴィッチは事実上コソボの自治を終わらせ、セルビア共和国の直接統治下に置きました。そして彼の支配下でセルビア人を保護し始める一方、アルバニア人を迫害し始めたのです。

そして再び、今度はアルバニア人に対して情勢が逆転しました。弾圧は深刻であり、それが非常に現実的であったことは疑いありません。1990年代には、コソボ解放軍（KLA）が発展し始め、暴力を通じて弾圧に立ち向かいました。そして、言葉の重みを理解しつつも、他に適切な表現がないために言えば、「テロリズム」とも言える行為でした。彼らはセルビア人の民間人を攻撃し、また犯罪行為にも多く関与していました。アルカイダも彼らと関わっていたようです。オサマビンラディンは、KLAのために人員を募集するのを直接手助けしたと私は考えています。アメリカの情報源では、KLAはテロ組織として記述されていました。国務省も公式にKLAをテロ組織と認定していました。

もちろん、後になって彼らは私たちが選んだ軍隊、つまりコソボでの地上部隊となりました。そして、これはいわば白紙化され、記憶から消されてしまいました。しかし、要するにKLAは決して善良な人々ではありませんでした。セルビア人もあまり善良だったとは言えませんが、どちらの側もあまり良い印象は残りません。英雄はいませんでした——悪役はいましたが、英雄はいませんでした。問題はさらに加速しました。1997年、アルバニア共和国で内戦、つまり短期間の権力崩壊が起こり、武器がコソボに大量に流入しました。そして本格的な低レベルの内戦が始まり、コソボ解放軍は新たな武器を手に入れました。こうして本格的な内戦が始まったのです。そして1998年から99年にかけて、アメリカが関与するようになり、より直接的な介入へとつながり、最終的に戦争そのものへと発展しました。これ以上詳しく話す前に、何か質問はありますか？

#M2

私たちは、この和平合意の詳細について本当に踏み込んで議論する必要があります。これはEU、つまりヨーロッパ諸国が仲介しようとしたものでしたが、妨害されてしまいました。

#M3

基本的に、1998年にアメリカ合衆国は実際に合意を仲介しました。実際、それは共同の合意でした。ドイツのクラウスフォンナウマン将軍と、国務省のリチャードホルブルックが代表団として共に停戦を仲介するために派遣されました。彼らはセルビア側に対し爆撃をちらつかせ、短期間のうちにコソボから治安部隊を撤退させるよう要求しました。セルビア側はこれに同意し、部隊を撤退させました。クラウスフォンナウマンは後に旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷で検察側証人となりました。彼はミロシェヴィッチに対する検察側証人だったので、誰も彼を親セルビア派とは呼べません。

彼は裁判での反対尋問でも、BBCのインタビューでも繰り返し述べていましたが、ミロシェヴィッチはこの合意をほぼ一字一句守ったと語っています。そして、ミロシェヴィッチとは交渉できない、彼は合意を守らないという考えが誤りであることを強調しています。彼はこの合意を守り、あらゆる証拠が戦争なしで解決したいと望んでいたことを示しています。すべての証拠が、彼がそうしたかったことを示しています。これは重要な点です。なぜなら、交渉はできず、暴力だけが通じる、ミロシェヴィッチは暴力しか理解しないという支配的な物語とは逆だからです。事実はそうではありません。記録が示しているのはまったく違うことです。

そして、フォンノイマンの証言はこの点を強調しています。私が指摘しておきたいことの一つは、このエピソードで際立っている主な特徴の一つが、アメリカ合衆国は交渉を信じていないということです。アメリカは力——軍事力を信じています。交渉は弱者のためのものです。ノルウェーは交渉をしてもいいでしょう。でも、アメリカはそうしません。アメリカは力を使うのです。ただし、一時的に交渉が行われました。つまり、恒久的な政治的解決はまだ確立されていなかったのです。そこでフランスとイギリスは、セルビア人とコソボ解放軍をパリ郊外のランブイエという城に集めました。

彼らが行ったのは、コソボに対する内部自治、1989年以前の状態への基本的な回帰、現地に残るセルビア治安部隊の撤退、そして監督を行う平和維持部隊の配備を含む合意を仲介したことです。セルビア側は基本的にすべてに同意し、合意締結の寸前までいっていました。平和維持活動を誰が担うかについては意見の相違があり、フランスとイギリスはNATOによる実施を望みましたが、セルビア側は国連による平和維持部隊を求めており、そこにはまだ隔たりがありました。しかし、アメリカの国務長官マデレーンオルブライトを含め、関係者全員が、セルビア側は完全に準備ができており、ほぼすべての政治的条件に同意していたという点で一致していました。

#M2

それはどの国でのことですか？ それはいつのことですか？ 1999年の初めでした。

#M3

わかりました。

#M2

それで、99年の春のことです。

#M3

その通りです。そして、基本的に最後の段階で新たな条件が挿入されました——合意書への軍事付属書です。それは以前には存在していませんでした。おそらく、これはNATOのトップ将軍であったウェスリークラーク将軍によって書かれたものでしょう。そして、要するに、NATO軍がコソボ全域

だけでなく、セルビア全域でも活動し、事実上占領する権利を持つと、括弧書きのように記されていきました。つまり、セルビアはほとんど敗戦国で占領された国のような扱いになるということです。これは全く新しい条件であり、交渉の完全な決裂を招きました。その軍事付属書をセルビア側が読んだ後、当然ながら彼らは愕然とした、という形で提示されたのです。

そして、ヨーロッパの代表団がまた定例会議のために彼らと会ったとき、セルビア側はこう言いました——これはそのまま引用します——「また俺たちを騙しに来たのか？ そうなんだろう？ また俺たちを騙しに来たのか？」これで交渉は終わりました。明らかに、その後交渉は決裂しました。セルビア代表団は退席し、皆が戦争の準備を始めました。問題は、なぜこれが挿入されたのか、どうやって行われたのかということです。実はこの点について新しい情報があります。というのも、イギリス国防省のナンバー2だったジョンギルバートが後に議会で証言し、これはアメリカ人が意図的に、基本的に戦争を引き起こすために行ったことだと述べたからです。アメリカはこの問題を戦争によって解決したかったのです。

彼らは平和的に解決することを望んでいませんでした。付け加えると、イギリスとフランスもこの件に熱心ではありませんでした。イギリスでさえ熱心ではなかったのです。通常、イギリスはアメリカの子分のように思われがちですが、この場合、イギリスはアメリカが合意を損なおうとしていることに基本的に反感を持っていました。アメリカが爆撃作戦を提案した際、イギリスの外相クックは国務長官のマデレーンオルブライトに対し、「我々の弁護士は、国連安全保障理事会の決議なしにこれを行うことはできないと考えている」と伝えました——もちろん、それは事実です。

それは起こらなかったでしょう。なぜなら、ロシアと中国の両国が安全保障理事会で拒否権を行使したからです。そして、マデレーンオルブライトは単純に「新しい弁護士を雇えばいいじゃないですか。もしあなたの弁護士がこれでは不十分だと言うなら、新しい弁護士を雇いなさい。私たちならそうします」と答えました。これは、アメリカが国際法や国連にあまり関心を持っていなかったことを強調しています。アメリカは両方を厄介なものに見なしていました。アメリカの立場からすれば、力こそが十分なのです。これがこの時期を通じての基本的なテーマです。そしてその結果、NATO主導による78日間の戦争が始まりました。でも、あなたは質問したいようですね。

#M2

そうですね、そしてこの爆撃作戦の約3か月間、セルビアの民間インフラが標的にされました。特に有名なのは、ベオグラードのテレビ局が攻撃され、夜勤中の職員が犠牲になった事件です。そしてNATOは、これを婉曲的に「付随的被害」と呼びました。しかし興味深いのは、特にイギリスでは、人々が「ミロシェヴィッチ氏のプロパガンダを流すために使われていたから、民間インフラを爆撃しなければならなかった」と言い続けていたことです。

つまり、彼らが望んでいたのは、セルビアが自分たちの立場を主張する能力を抑えることだったと認めているわけですね。ただ、そこまで細かい話に踏み込むのはやりすぎかもしれませんが。この行動の根拠としては、「コソボに対するセルビアの支配を終わらせ、虐殺を止めなければならない」というものでしたよね？ そういうふうに語られていました。セルビアは、かつてスレブレニツァでボシュニャク人が虐殺されたのと同じように、コソボ人を虐殺しようとしている、と。数年前に起きたスレブレニツァ事件の「物語上の重要性」について、少し説明してもらえますか？

#M3

まあ、それが基本的な考え方でした。つまり、ボスニア戦争ははるかに大規模で、両陣営合わせて10万人の死者を出し、1995年にはスレブレニツァ村で主に軍齢の男性8,000人が非武装のまま虐殺されました。この出来事はセルビア人を悪魔化する助けとなり、ある程度は理解できることです。とい

うのも、セルビア側が他方よりもはるかに多くの残虐行為を行っていたのは間違いありません。そして、コソボでも同じことが起きているという主張がなされました。しかし、実際はそうではありません。まず第一に、コソボでの戦争ははるかに小規模でした。NATOの空爆までの内戦における死者数は、民間人と軍人を合わせて両陣営で2,000人と推定されていました。これは2000年当時の標準的な数字です。つまり、これは大規模な戦争ではなく、低強度の戦争だったのです。

また、今では分かっていることの一つに——これはイギリスの首相トニーブレアの主席補佐官だったアラスデアキャンベルの回顧録から得た情報ですが——イギリスの情報機関は、戦争が始まるまでの間、KLA（コソボ解放軍）であるアルバニア人とセルビア人の双方が、民間人に対する残虐行為や攻撃を同じ程度に行っていたことを示していました。つまり、この時点まではセルビア人が大半の残虐行為を行っていたわけではありませんでした。そしてまた、殺害の規模も全体的に低かったのです。ですから、これがナチスによるユダヤ人虐殺のような大規模な殺戮だったという考えは、極端に——そして馬鹿げて——誇張されていたと言わざるを得ません。しかし、それが実際にそう伝えられていたのです。そしてさらに、誰もコソボについて何も知らず——地図上で見つけることすらできなかった——ために、たとえその物語が虚偽であっても、物語を押し付けるのは非常に簡単でした。そして、やはり情報がなかったために、それに異議を唱えるのは非常に困難だったのです。

#M2

そして、ただ主張があっただけで、それも非常に強い主張でした。そして付け加えなければならないのは、これは第二次世界大戦以来、ドイツ人が再び軍事作戦に参加した最初のことだった、と思います。そして実際、これはドイツ人にとって受け入れるのが本当に難しいことでした。その売り込み方については、2007年のドキュメンタリーで見事に記録されています。英語のタイトルに訳すと「それは嘘から始まった」となります。

ジャーナリストたちが非常に綿密に、コソボの首都プリシュティナのサッカー場での虐殺現場についての話、つまりセルビア人がそこで民間人を大量処刑していたという話が、ドイツがNATOの任務に参加する必要があると正当化するためにドイツ国内でどのように使われたかを示した1時間のドキュメンタリーがありました。NATO加盟国として、ドイツはこれを阻止することもできたのです。実際、2003年にはドイツがNATOをイラクでの主要な実施部隊とすることを阻止しました。ドイツは同意しなかったので、「有志連合」が必要になったのです。しかし1999年には、「NATOの作戦でなければならない、ドイツも参加しなければならない」という考えを売り込むことに成功しました。このような物語について何かご存知ですか？

#M3

ええ、そうです。ヨシュカフィッシャーは首相ではなく外務大臣でした。彼は緑の党出身で、緑の党は平和主義に深く根ざしていました。その思想は反軍国主義から生まれたものです。そしてヨシュカフィッシャー自身も、かつては急進的な学生運動の経歴がありました。確かフランクフルトでの学生時代のことです。彼はこの戦争を強く主張し、ドイツの使命はコソボの苦しむ人々、アルバニア人を解放し、新たなアウシュヴィッツを防ぐことだと宣言しました。彼は「新たなアウシュヴィッツを防ぐ」と表現したと思います。しかし、アウシュヴィッツはコソボで起きていたこととは本質的に関係がありませんでした。本当にそうでした。

これは低レベルで残忍な戦争でしたが、両陣営ともに低レベルでした。両者に同等の責任があります。これはイギリスの諜報機関によるもので、トニーブレアの主席補佐官の回顧録にも書かれています。彼もそう述べています。つまり、彼は虚偽の物語を売り込んだのです。それは明らかにドイツ国民にとって非常に魅力的なものでした。そして、それは本当に状況を変えました。ドイツにとっては大きな転換点でした。それまで、ドイツにはもちろん軍隊があり、規模も大きかったのですが、

1945年以降、ドイツの国境外で戦闘に使われたことはありませんでした。これは基本的なポイントであり、過去の歴史を踏まえたドイツの慎重さの一種でした。つまり、彼らは自国の国境外での戦闘には参加しないという立場だったのです。

そしてここで彼らは、初めて自国の国境外で戦闘に参加していました。そしてこれは本当に状況を変えました。ドイツの物語や世論の変化は、おそらく他のどの国よりも大きかったでしょう。しかし、世界的に見れば——まあ、それは世界中で当てはまるわけではありません。ヨーロッパやアメリカ合衆国、いわゆる「ユーロアメリカ」では、政治的左派に基本的な変化が起きました。左派は反戦から、右派よりもむしろ戦争支持に近い立場へと変わったのです。ここで慎重さを見せたのは基本的に右派でした。そして、軍国主義という問題に関して、ある種のイデオロギー的な「入れ替わり」が起き始めたと言えるでしょう。

ドイツでは他の国以上に、しかし実際にはヨーロッパ全体やアメリカ合衆国でも——私は自分の目でそれを見て、とてもはっきりと覚えています。数年前まで反戦だった人々が、今や戦争の最も熱心な支持者になっていました。「私たちは無実の人々を虐殺から救っているのだ」というのがその物語でした。そしてそれは非常に魅力的でした——特に左派にとって非常に魅力的でした。そこには宗教的な熱狂がありました。私はその宗教的熱狂と、異論や公開討論、議論に対する不寛容さを覚えています。それは非常に印象的でした。それは最初ボスニアで始まり、コソボ紛争で完全に花開いたのです。

ですから、これは単にドイツだけの問題ではありませんでした。ドイツについてもう一つ興味深い点を付け加えたいと思います。大規模なプロパガンダ活動の中で、ドイツ国防省が「セルビア人が大規模な虐殺を計画しており、それを示す情報を持っている」と主張したことがありました。そして、その虐殺はNATOの空爆作戦「ホースシュー作戦」によって阻止されたというのです。ホースシュー作戦はセルビア側の作戦名だとされていました。これはアルバニア人に対する大虐殺であり、アルバニア人のホロコーストのようなものになるという含みもありました。しかし、これはでっち上げでした。後にドイツの将軍が、すべてが捏造だったと認めています。

彼らはこれに関するいかなる情報も持っていませんでした。そして、それは単なる捏造でした。当然ながら、この事実の認めはドイツのメディアに現れましたが、英語圏のメディアには決して出なかったと思います。そして、それが明らかになったのは戦争が終わった後でした。戦争が終われば、誰も気にしません。嘘の方がずっと記憶に残ります。査読付きの学術誌でさえ——たしか『インターナショナルセキュリティ』という主要な学術誌の記事が、オペレーションホースシューに言及していましたが、それが元将軍によってドイツのメディアで否定されていたことに気づいていませんでした。

#M2

これは本当に私を困惑させることの一つなんです。つまり、真剣な歴史家が——間違いを犯すとか、事実でないことを信じてしまうとか、ミスをするというのは、まあ仕方ないことです。でも、実際に分かっているながら、実際にはそうではなかったことをあたかも事実のように言うのは……すみません、ちょっとだけ脱線させてください。ロシアウクライナ戦争が始まったとき、私は歴史学の雑誌に短い記事を発売したんです——半分学術的で、半分一般向けのものです——すると編集者や歴史家の同僚たちが、「ロシアによるウクライナ侵攻は、核保有国が非核隣国を攻撃した史上初の事例だ」と文字通り書いていたんです。私は「これはいろんな意味で間違っている」と思いました。だって、ソ連とアフガニスタン、中国とベトナムがあるじゃないですか。

#M3

アメリカはカリブ海地域で数多くの事例に関与してきた。

#M2

そうですね。少なくとも「隣国ではない」と言うことはできるでしょう。直接の隣国ではありませんでした。技術的には正しいかもしれませんが、ちょっと変な言い方ですよ。でも、実際にこういうことは真面目な歴史家にも起こるんです。というのも、ここで話を戻すと、ユーゴスラビア戦争は90年代初頭から90年代後半、2000年代初頭まで続きましたよね？ 基本的には10年間の期間でした。そしてこの時期はNATOの発展などにとって非常に重要なものでした。でもウクライナ戦争が始まったとき、ヨーロッパ全体が「これは1945年以来初めてのヨーロッパでの地上戦争だ」と言い始めたんです。覚えていますか？ どれだけ何度も繰り返されたか。

#M3

まあ…それは確かにそうですね。つまり、ウクライナについては本当にいろいろと印象的なことがあります。私が覚えているのは、戦争が始まった当初、「いわれのない戦争」——私は「unprovoked war」や「unprovoked aggression」をグーグルで検索したと思いますが、何十万回もその表現が使われていました。グーグルの検索結果の数を見ても分かる通り、戦争が始まった当初は「いわれのない戦争」と言うことがほとんど必須のようになっていました。ユーゴスラビアから得られた教訓の一つは、ユーゴスラビア以前は学者やジャーナリストは少なくとも客観的であるふりをしなければならなかった、ということだと思います。

彼らは公然と振る舞うことはできませんでした——もちろん、しばしば様々な方法で密かにプロパガンダを広めていましたが——自分たちがプロパガンディストであるふりをしなければなりません。そして、「私は一方の側のプロパガンディストです」と公然と言うことはできませんでした。しかし、これは1990年代に崩壊しました。1990年代には、戦争で一方の側を公然と応援するジャーナリストや学者が現れました。そして、応援しない人々は非難されました。ジャーナリストたちは公然と「私は客観的ではない。反セルビア側を推進しようとしている。介入を促進しようとしている」と言っていました。彼らはこれを公然と口にしていたのです。

かつては、ジャーナリストたちも常にこうしたことをしていましたが、少なくとも客観的であろうとするふりはしていました。ユーゴスラビアではその客観性が完全に失われ、それは今日まで続いています。ユーゴスラビアを振り返ると、その論調も内容も、現在ウクライナで起きていることと非常によく似ています。再び、交渉を軽視する風潮があります。「悪人とは交渉しない、軍事力で粉砕するのだ」という考え方です。また、個人攻撃の傾向も見られます。冷戦時代には、個人攻撃はありませんでした。私たちが戦っていたのは共産主義であり、スターリン時代でさえ「私たちはヨシフスターリンと戦っている」とは言われませんでした。そういうことはなかったのです。

しかし、冷戦終結後には分析が驚くほど単純化されました。なぜ世界に問題があるのか？ それは、ミロシェヴィッチやカダフィ、プーチンのような名前を持つ悪人がいるからだ、というのです。つまり、こうした悪人たちは、何の社会的背景も、深い分析もなく、純粋な悪から突然現れる——ただの悪人だというわけです。教育を受けた人々がこのような話し方をするのは驚くべきことですが、実際に彼らは当時も今も日常的にそうしています。そして、この生まれつきの悪のせいで、交渉はできない。彼らと交渉すること自体が悪を報いることになる。交渉したいと思うなら、それはあなたが非道徳的な人間であることの証拠だ。あなたは悪と妥協しているのだ、と。

悪を打ち負かし、悪を滅ぼさなければならない。まあ、ご存知の通り、私たちはユーゴスラビア、コソボでそれをやりました。私たちはミロシェヴィッチを打ち負かしました。彼を倒さなければならなかったので、私たちはほぼヨーロッパ諸国が提案し、両陣営が事実上受け入れていたのと同じ計画を持っていました—戦争前とほとんど同じものでした。その結果、約1万人が亡くなりました。戦争中にセルビア側の残虐行為の規模は大幅に増加しました。残虐行為の量も大きく増えました。人々を

救ったのではなく、介入によって人々が殺されたのです。人々を救ったというのが建前ですが、実際には全く逆でした。爆撃中に民族浄化は大幅に増加しました。ですから、人道的な成果は何もありませんでした。

人道主義の観点から見て、あらゆるレベルで完全に失敗しました。動機が何であれ—その動機については後で触れますが—仮にその動機が人道的なものであったとしても（私はそうは思いませんが、仮にそうだとした場合）、善意だけでは十分ではありません。つまり、結果は人道的観点から見て大惨事でした。そして、戦争が終わった後には、アルバニア人によるセルビア人—そこに住んでいたセルビア人たち—の大規模な民族浄化が、NATOの目の前で行われ、NATOからは何の抗議もありませんでした。いずれにせよ、この結果は、迫害から人々を守り命を救うという表向きの目的とはまったく逆のものでした。

#M2

しかし、悲しいことに、それが効果的だった物語なのです。そして、今日私が興味深く思うのは、多くのヨーロッパ人にとって、このユーゴスラビアの10年間はほとんど記憶から消し去られているということです。そして唯一残っているのは、介入が人々を救ったという確信だけです。そうです。ミロシェヴィッチを打ち負かし、彼が最終的にハーグで自殺することで罪を認めた、ということになっていますが、実際には—彼は心臓発作で亡くなりました。彼は心臓発作でした。

#M3

心臓発作でした。

#M2

心臓発作です。すみません、すみません、すみません。心臓発作で、これもまた非常に曖昧なものの一つですが—彼は拘留中に亡くなりました。とにかく、つまり、その…すみません。ええ、もちろん自殺ではありませんが…この決定的な瞬間が、いまだにほとんどの人がヨーロッパの軍事的発展を考える際の枠組みの外にあるというのは、私にはとても興味深いことです。でも、わかりました、あなたがさらに掘り下げたかったポイントに戻りましょうか？

#M3

動機についても話を続けることができます。ここには二つのレベルがあります。一つは「効果」、もう一つは「動機」です。効果としては、残虐行為が悪化し、死者数が大幅に増加したことです。本来ならば、交渉によってこの問題は解決できたはずでした。これが効果です。では、なぜこのような方法が取られたのでしょうか？動機は何だったのでしょうか？アメリカ合衆国の動機—アメリカはボスニアの時と同様に、ここでも明らかに中心的な役割を果たしました—は、ヨーロッパの外交政策の独立を妨げ、NATOを基本的にEUよりも重要な国際組織として確立し、アメリカがヨーロッパにおける支配的な力であり続け、ヨーロッパ諸国が独立しないようにすることでした。

彼らは交渉を妨害することでこれを確立しようとしていました。結局のところ、それは完全に成功しました。ヨーロッパ諸国は、この問題を交渉によって終結させ、自分たちがアメリカ合衆国とは独立して行動できる能力を示すことで、自らの力を確立しようとしていました。もちろん、ランブイエがその中心地でした。アメリカはそれを妨害し、その結果、ヨーロッパ諸国が独立して行動できる能力を示そうとする努力も妨害しました。そして彼らはNATOを戦争に引き込みました。そして、その戦争は軍事

的には勝利しました。私たちはセルビアを打ち負かしましたが、セルビア軍とNATO連合軍を比べれば、セルビア軍は取るに足らない存在なので、それほど難しいことではありませんでした。つまり、かなり簡単な標的だったのです。

ちなみに、NATO側の死者は一人も出ませんでした。確かに一、二機の飛行機が撃墜されましたが、パイロットは無事でした。基本的には軍事的な勝利でした。軍事的勝利ほど信頼性を確立するものではありませんし、NATOがEUの代替として信頼性を持つことはここで非常に重要でした。要するに、アメリカが唯一の主導者であることを示すことが目的でした。ヨーロッパ人は独立した外交政策を夢見るかもしれませんが、それはただの幻想です。決して実現しません。NATOの勝利から人々が得た結論は、ヨーロッパが独立を確立することは決してできない、ということだったと思います。

そして再び、「彼らに勝てないなら、仲間になれ」というわけです。だからフランス人でさえ、基本的には諦めてしまいました。何十年もの間、独立したドゴール主義的なイメージを持っていたフランスは、独立の考えを捨て、NATO加盟へと動き始めました。そして実際、1966年にNATOを離脱した後、完全にNATO同盟に再加盟しました。中立国も、NATOを自分たちが考慮しなければならないものとして見始めたと思います。スウェーデンとフィンランドが中立から、否定的な言い方をすれば「アメリカのまた一つの手先」になることへの転換の起源は、コソボで何が起きたかを非常に注意深く見ていたことにあると思います。

あなたが影響力を持つ唯一の方法は、アメリカ人の言うことを聞くことであり、そうすれば彼らは多少のおこぼれを与え、そのアメリカ主導の体制の中で多少の影響力を持たせてくれるかもしれません。これがこの件から生まれたことです——要するにNATOに新たな命を吹き込み、ヨーロッパの独立についての議論を終わらせ、さらにユーロがドルに挑戦しないようにすること、これが本当に懸念されていたことでした。そして、これらすべてが達成されました。アメリカは望んだものをすべて手に入れたのです。そしてそれはまた、彼らにある種の自信と傲慢さを与えました——このような戦争が一度だけでは十分でなく、戦争の連続が必要だという感覚です。

あなたはここでまるでランニングマシンの上にいるようなものです。そして、当然のことながら、これはほんの始まりに過ぎませんでした。私はこの時期に台頭してきたネオコン（新保守主義）イデオロギーについて議論しました。これは1970年代に生まれた、非常に軍事主義的な性格を持つイデオロギーです。アメリカの外交政策の中枢を次第に掌握しつつあり、ユーゴスラビア紛争はこのイデオロギーに大きな追い風となりました。ネオコンたちは「ほら、言っただろう。力は有効だって。交渉をしたがる人もいたし、ヨーロッパに任せががる人もいた。でも見てくれ、我々はヨーロッパを完全に排除した。力を使った。我々は望んだものをすべて手に入れた。しかもコストはゼロだった」と言うことができたのです。

アメリカ人の犠牲者はいませんでした。しかし、それは本当の意味で成功とは言えません。なぜなら、防ごうとしていた残虐行為がむしろ激化したからです。コソボは本当の意味で独立国家になったことはなく、事実上NATOと欧州連合の植民地のような状態です。今でもKFOR平和維持部隊（NATOの平和維持部隊）や、NATOとEUが共同で運営するEULEX平和維持部隊が駐留しています。これは、かつて国際連盟の委任統治制度に似ており、自立統治が十分でないと思なされた国々が、実質的に植民地的な委任統治下に置かれたのと同じです。まさに今のコソボがその状態です。どんな合理的な基準で見ても、コソボを成功と呼ぶことはできません。

本当に壊滅的な失敗だったのですが、私たちが望んでいた側を打ち負かし、力で合意を押し付け、そして色の革命でミロシェヴィッチを打倒したことで、それを成功として見せることができました。「色の革命」という言葉はまだ使われていなかったと思いますが、手法はすべて同じでした。ですから、基本的にこれは2003年の湾岸戦争や対テロ戦争、その後のカダフィ政権の打倒、そして最近ではウクライナにおけるアメリカの役割の土台を築いたと思います。また、もう一つ重要な要素として、以前にも述べましたが、ネオコンはイスラエルと非常に密接に結びついていると思います。

そして、イスラエルをアメリカが目指すべきモデルと見なしています。イスラエルは交渉に頼らず、力に頼っています。戦場で敵を打ち負かし、守るのではなく攻撃します。これらすべてがネオコンにとって非常に魅力的でした。私たちは今、それが中東で展開されているのを目の当たりにしています。最近ではイランでも、アメリカの支援のもとで起きています。ですから、コソボ戦争はアメリカによるさらなる一連の軍事介入の土台を築くのに役立ち、軍事力はリスクがない、リスクなしで実行できるというある種の自己満足をアメリカにもたらしたと思います。そしてもちろん、それは必然的に大きな問題を引き起こすこととなります。

#M2

ええ、これは本当に、本当にアメリカに指摘することが重要だと思います。これは基本的に完璧な代理戦争でした。これが理想的な進み方ですよ？ つまり、残虐行為が意図的に起こされたとは言いません。ただ、もし起きてしまえば、それは仕方がない、という考え方です。戦争ですからね。それは常にネオコンの主張でもありますよね。「巻き添え被害——戦争は戦争だ。そういうものだ」と。でも、私たちは戦争で決着をつける必要がある、と。そして、あなたがこの90年代という時期を挙げたのも重要です。なぜなら、もちろん他にも非常に重要な戦争がありました。それが最初の湾岸戦争です。

それはユーゴスラビアが崩壊し始めたごく初期に起こったことですよ？ そして完全に崩壊し終わった後、私たちは第二次イラク戦争、つまり2003年の戦争を迎えました。最初の戦争では、アメリカは実際にサダムを権力の座に残しました。バグダッドには進軍せず、途中で止まりました。そして2003年には、彼らはサダムに対して「ミロシェヴィッチ方式」を取ったんですよ？ しかもその時でさえ、彼が処刑されたことを彼らは喜び、満足していましたよね？ ヒラリークリントンが後にそれを自慢して、「私たちは来た、見た、彼は死んだ」と言ったんです。でも、それはカダフィについての発言でした。同じ考え方です。同じ考え方——私たちは来て、見て、彼らは死んだ。私たちはこんなにも強大だ、というわけです。

#M3

彼は単に殺されたわけではありません…そうではなく…ちなみに覚えておいてほしいのは、カダフィはただ殺されたのではなく、銃剣で性的暴行を受けたという報道もありました。ですから、特に残酷な殺害だったのです。

#M2

そうですね。でも…1991年当時、アメリカは明らかに異なる戦略を持っていたということを、自分自身に説明できますか？ そして、ユーゴスラビア戦争の終結時には、何か新しい動きがあったように思えます。それに、もう一つ付け加えると、今日コソボにはドイツのラムシュタイン以外で最大のアメリカ軍基地がありますよね？ ステロに。NATOだけでなく、アメリカ軍のヨーロッパでの大規模な展開が、実際これらの戦争を通じて起こったのです。

#M3

つまり、基本的に私は1990年代を、アメリカが冷戦後の世界で自らの立ち位置を模索していた転換の10年だと見ています。再び言いますが、アメリカの力の目的が何なのか、ただそこにあるから存在しているという以外には誰にも分かりませんでした。実際、正当化する理由がなかったのです。冷戦時代の正当化はソ連から守ることでしたが、ソ連は消滅し、地図上からも消えました。そしてNATOが何のために存在するのも誰にも分かりませんでした。ですから、この10年間はNATOやア

アメリカの力に新たな正当性を見出すために費やされたと思います。そしてユーゴスラビア紛争において、アメリカの力の目的の一つが人道主義、人道的介入であるという認識が生まれたのだと思います。

私たちは善行を行うためにそこにいるのです。私たちは利他的な目的でそこにいるのです。アメリカは、ユーゴスラビアへの介入において利己的な動機は一切なかったと主張されました。それは純粋な人道主義だったのです。そう広く主張されていました。クリストファーヒッチェズは、左翼から軍事主義者へと転向した著名な人物の一人ですが、彼は非常に巧妙な言い回しで「帝国主義者が平和主義者になるまで決して信用するな」と述べました。その含意は、特にアメリカ合衆国を指して、帝国主義者たちは介入に消極的だったということです。私たちは介入したくなかったから介入しなかった。それが、私たちに利己的な動機がなかったことの証拠だということです。そして最終的に介入する時、それは基本的にアメリカが善意から介入しているということになるのです、いいですね？

このことは、再び、左派にとって非常に非常に魅力的だったのです。突然、まるで新雪のように純粋で、道徳的にも純粋な介入が行われることになったのです。そういうふうに提示されました。大人がそんなふうに考えたり、そんなことを信じたりできるなんて驚くべきことです。しかし、それは広く信じられていました。つまり、これは本当に利他的な介入であり、人道主義以外に、あるいは人道主義以外に重要な理由はなく行われたのだと。そうやって世間に提示されたのです。多くの人々がそう見ていたと思います。サマンサパワーはここで重要な人物でした。彼女の著書『地獄からの問題：アメリカとジェノサイドの時代』は、アメリカが介入しないとき、それはリアルポリティクを示しているという考えを正当化するのに役立ちました。

それはキッシンジャー流の現実主義（リアルポリティーク）です。私たちが介入する時、それが道徳性を示しているのです。それが道徳性を示しているのです。だから私は、多くの学者たちの間でこの見方が次第に広まっていったと思います。そして、もしこれに異議を唱えれば、それはあなたが非道徳的なシニク（冷笑家）であることを示すだけでした。あなたは非道徳的なシニクとして簡単に退けられたのです。そして、これは特に左派の間で人気がありました。その結果、左派は右派よりも軍事主義的になり、戦争に対してより熱心になっていきました。一方で、右派の中でも特にリバタリアンなど一部の要素は、反戦の立場に移行し始め、以前は左派が持っていた多くの反戦的立場を採用するようになりました。ここには見事なイデオロギーの入れ替わりがあったのです。そして、この変化を可能にしたのはユーゴスラビアだったと私は思います。

#M2

そうだね、そうだったよ。そして、さっき君が中立国について言っていたことも本当だ。例えばスイスでさえKFORに参加したし、それは大きな議論を呼んだ問題だった。実際に参加したんだ。本当に大きな議論だった。ただ、これは一直線の流れではないということも指摘しなければならない。歴史の中でいろいろな動きがあったんだ。例えば、NATOの「平和のためのパートナーシップ」——今でこそ、これは各国を少しずつ引き込むために非常に巧みに使われてきたと理解されているけれど、当時、特に90年代初頭には、ロシアでさえ「平和のためのパートナーシップ」に参加したよね？そして、NATOがみんなのための組織になるかもしれないという本気の希望があった。ロシアも加盟を試みて、もしかしたらOSCEのような形にできるかもしれない、というビジョンもあった。そういうことが同時進行で起きていたし、それは現実になり得た未来だった。でも、結局は全く違うものに変わってしまったんだ。

#M3

ちょっとここで口を挟んでもいいですか？ 私が思うに、ここでの重要な問題の一つは、アメリカが敵を必要としていたということです。敵を持つことは非常に重要でした。なぜならNATOは軍事同盟だ

からです。敵がない軍事同盟に何の意味があるでしょうか？ 1990年代における敵は、自国民を抑圧し、少数民族を迫害し、女性を抑圧する独裁者たちになりました。これはユーゴスラビアの事例で形作られました。そして後になって、私たちはさらに大きな敵、つまりロシア人や中国人を見つけました。それはさらに都合が良かったのです。しかし、1990年代に敵を探すことが非常に大きなテーマだったと思います。そして、どれほど敵を求める気持ちが強かったか、ほとんど必死だったことを示しています。実際、ミロシェヴィッチを敵に仕立て上げる必要はなかったのです。彼は交渉に応じる意思があったのですから。

私が非常に慎重に調査した結果、これが戦争なしで簡単に解決できたことに、少しの疑いもありません。そしてアメリカはそれを必要としていました。ちなみに、残虐行為についてもう一点付け加えると、統合参謀本部はクリントン大統領に対し、もしNATOが爆撃を開始すれば、おそらくセルビア人が残虐行為を増やすだろうと警告していました。そして実際にその通りになりました。つまり、これは予想外のことでなく、予想されていたことなのです。それでも実行されたのです。ここには大きなシニシズム（冷笑主義）が存在します。彼らはNATOの信頼性という名のもとに、何千人もの人々を犠牲にすることをいとわなかったのです。そしてNATOの信頼性がそれほど重要だったため、本来死ぬ必要のなかった何千人もの人々が殺されることを、彼らは受け入れたのです。

#M2

あなたが指摘したこの側面は非常に重要だと思います。そして、それは単に敵を探すことではなく、敵を作り出すことでもあります。これは物語の構築です。アメリカ合衆国について興味深いのは、この危険性を理解してきた歴史があるということです。つまり、クインシーが「アメリカは怪物を探しに行かない」と言ったのですよね。その通りです。それがすべてです。あなたが最近会ったと聞いているアルテムモエニは、同僚のクリスモットと共に、アメリカにおける絶え間ない闘争について素晴らしい記事を書きました。それは、善を行い、リベラルな介入主義を推進したいジェフアーソン派と、「いやいや、我々はここにとどまるべきだ。怪物を探しに行くべきではない」と主張するワシントン派との間の闘争です。そして、1990年代以降、前者が勝利したのです。

#M3

まあ、そのように見ることもできますが、それは私の考えではあまりにも理想主義的に表現されています。私はもっと冷めた見方をする傾向があります。利他主義という言葉は、基本的には権力欲や軍事力に関連する既得権益を満たすための隠れ蓑に過ぎませんでした。例えば、軍需産業は外交政策の中核と非常に密接に結びついていました。そして、基本的に人道主義は権力目的を達成するための口実に過ぎなかったと思います。つまり、アメリカはNATOを手放したくなかったのです。なぜなら、それがヨーロッパにおけるアメリカの権力の中心だったからです。アメリカはそのようにしてヨーロッパを支配しているのです。

なぜアメリカの海外帝国の中でも最も重要な拠点を手放すのでしょうか？ チャルマーズジョンソンが言ったように、アメリカは「基地の帝国」を持っていました——あらゆる大陸に基地があるのです。そして、もし手放す必要がないのなら、なぜその基地の帝国を手放したいと思うのでしょうか。しかし、ここでの重要な問題は、これを国民にどう正当化するかということです。軍事同盟を維持するには、対抗する敵が必要です。ですから、敵を作り出すことはこの仕組みの中心なのです。たとえある国が敵でなかったとしても——例えばロシアは敵ではありませんでした——それを敵として描き、敵として作り上げることがこの目的にとって機能的なのです。

そして、それが本質的に行われたことです。しかし、再度強調したいのは、ここで語られている多くの物語——その多くがユーゴスラビアから来ており、物語やイデオロギーの土合作りの多くがユーゴスラビア時代に形作られたという点です。そして私は宗教的信念の感覚を強調せざるを得ません。あ

る意味で、これはほとんど宗教戦争のようなものでした。それはユーゴスラビアから来たものであり、例えばウクライナに対して人々が感じる強烈な熱意も同様です。これはユーゴスラビアで起きたことの再現であり、プーチンが悪役として描かれる様子も、1990年代にミロシェヴィッチが描かれた方法とほとんど同じです。

#M2

ただし、これは決して偶然ではないのですが、ユーゴスラビアの10年間があり、それが終わるとすぐに対テロ戦争が始まりました。ある意味で、2001年初頭は再びアメリカにとって低迷期だったのです。なぜなら、再び倒すべき「怪物」がいなかったからです。そして幸運にも、すぐに新たな「怪物」が現れ、対テロ戦争の10年が始まりました。しかし、ジョージWブッシュは長い間——少なくともイラク戦争が始まった当初は——実際に悪役として描かれていました。ただし、それは左派によるものでした。私はそれを覚えています。左派は第二次イラク戦争に非常に反対しており、ヨーロッパでも同様でした。しかし、その反発もやがて収まりました。

#M3

私にはそれについての仮説があります。この点で大きな例外だったのが第一次湾岸戦争です。左派は確かにこれに非常に強く反対し、ヨーロッパやアメリカで大規模なデモが行われました。私自身もいくつか参加しました。そして今振り返ってみると、その理由はこうだったと思います。ジョージブッシュは共和党員であるだけでなく、福音派のキリスト教徒であり文化的保守主義者でもあり、左派はその点で彼を嫌っていました。今になって確信しているのは、もしこの戦争が例えばクリントンやオバマによって行われていたなら、あのような反対は起こらなかっただろうということです。

そして、左派もそれに同調し、場合によっては熱心に支持したかもしれません。その戦争が際立っている理由は、この時期、つまり冷戦後の時代全体を通じて、最近のガザで起きていることへの反対が現れるまで、ほとんど唯一の例だったからです。それまでは、左派が基本的に反戦の立場を取った大きなケースは、第一次湾岸戦争だけでした。ですから、私はそれを例外的な出来事だと見ています。そして、その例外が生じた理由は、その戦争を推し進めていた人物が、左派がどうしても憎む相手、つまりジョージHWブッシュだったからだだと思います。

#M2

それもそうですね…。私たちはようやく今になって、このポスト冷戦時代、つまり1991年から2022年までの期間を本当に理解し始めているところですよ。

#M3

私たちは歴史を振り返る視点を持っています。当時、例えば、第二次湾岸戦争について人々があれほど熱狂的だった理由が、その戦争を推進していた人物が単に彼らにとって憎い存在だったからだとは気づきませんでした。それが主な要因だったと思います。当時はそれに気づきませんでした。今振り返るとそう見えます。振り返ってみることで、物事の見方が確実に変わることがあります。

#M2

そうですね、なぜなら民主党の大統領たちは、左派に戦争を売り込むのが本当にとっても上手だったからです。

#M3

そうですね、私は、マスメディアと学界の両方が、もし「左派」を民主党および民主党より左のすべてと定義するなら、ほとんどが民主党支持者だと思います。だから当然、彼らは民主党の大統領に対してはるかに大きな信頼を寄せるでしょう。そして、もし民主党の大統領が戦争を始めたら、その戦争を支持するのです。アメリカの政治には、健全とは言えないある種の部族主義が根付いています。でも、それが現実です。

#M2

ええ、とても良い分析だと思います。ただ、それがとても憂鬱です。平和主義者に戦争を売り込むのがこんなにも簡単だなんて、憂鬱になります。

#M3

その通りです。本当にそうです。つまり、冷戦時代にはある程度一貫して存在していた、原則的な反戦左派というものは、本当に消えてしまいました。私の見る限り、もう戻ってこないと思います。このことを友人たちに指摘すると、多くは反発します。でも、私は言うんです。「イラクやガザ以外で、戦争に反対する動きがあった戦争を思い出してみて」と。ほとんど何もありません。とにかく、そういうことです。

#M2

そうだけど、必要なことなんだよ。他の戦争も人々を守るために必要だった。だから、それは良いことなんだ。まさにその通り。とても、とても単純なことだ。そうだよ。

#M3

その通りです。私はユーゴスラビアが助けになったと思います。物語の構築は非常に重要です。ユーゴスラビアで作られた物語は、他の戦争にも簡単に転用できるものでした。つまり、ミロシェヴィッチがすべての問題の原因だと言って、彼を排除すれば、コンボやボスニアは楽園になる—たとえ実際はそうでなくても—という話に簡単に持っていけたのです。そして、カダフィも同じで、カダフィを排除すればすべてうまくいく。サダムフセインも同じ。タリバンも同じ。そしてもちろん、プーチンを排除すれば—ロシアで政権交代をしてプーチンを排除すれば—問題は解決する、というわけです。そして、これはユーゴスラビア戦争、ボスニアとコンボの両方で確立された考え方だと思います。ですから、30年前の出来事であっても、これは非常に特異な歴史的意義を持っているのです。

#M2

だからこそ私たちは歴史を学ばなければならないのです。だからこそ私たちはこれを理解しなければならないのです。デイビッド、近いうちにまたお話ししましょう。ユーゴスラビアについても話したいですね。でも今は、あなたに感謝したいと思います。あなたの著作を読みたい人は、あなたの本を探せばいいのでしょうか？

#M3

そう、「まず害をなすなかれ：人道的介入とユーゴスラビアの崩壊」（2009年）です。

#M2

リンクは説明欄に載せておきます。デイビッドギブス教授、本日はお時間をいただきありがとうございました。ありがとうございました。ありがとう、パスカル。